

## 紅部屋の二花嫁-すりおろしリンゴ編-

マナ「はあい、おねえちゃん。ご飯の時間だよ」

マナ「え？ なあに、そんな嫌そうな顔して」

マナ「ほら、食わず嫌いしてないで、ちゃんと食べてね」

マナ「じゃないとおねえちゃん、マナに捕まってこのワンルームから一步も出られないんだから、いつか餓死しちゃうよ？」

マナ「おねえちゃんは、もうマナがいないとなんにもできないんだから」

マナ「そう。つまりい……」

マナ「今、おねえちゃんはマナの言うことを聞くしかないの」

マナ「んふふ。今日は最近食欲のないおねえちゃんのために、リンゴを沢山すりおろしたんだ」

マナ「全部で13個はすりおろしたかな。たっぷりあるからいっぱい食べてね」

マナ「はい、おねえちゃん。あーんして」

マナ「んふふ。やっぱりこうしておねえちゃん、赤ちゃんに戻ったみたいでとっても可愛いね」

マナ「おいちいでしゅか？ マナが用意したおねえちゃん離乳食、おいちいでしゅか？」

マナ「これで早くマナの妹おっぱいから卒業できるといいでちゅねえ～？」

マナ「えへへ、もちろん冗談だよ」

マナ「おねえちゃんならいつでもマナのおっぱい吸わせてあげちゃうんだから♥」

マナ「ねえ、嬉しい？ 嬉しいよね、おねえちゃん？」

マナ「あっ……んふふふ、どうしたの？ お腹抱えてうずくまっちゃって」

マナ「お腹痛くなってきた？ あれ～、どうしてだろうね。きっと腐ってたんだね。」

マナ「でも、大丈夫だよ。おねえちゃんのお腹が壊れちゃっても、マナが看病してお世話してあげちゃう」

マナ「こんなこともあるかと思って、おねえちゃん専用のおまるだって買って用意してあるんだから」

マナ「リンゴ食べて痛くなった下腹部さすってあげながら、全部流れ出ちゃうの見守ってあげるよ」

マナ「ひっひっふう～、ひっひつふう～って、おねえちゃんのゆるゆるな排便お手伝いしちゃうの」

マナ「んふふつ。なんだかそれって、とっても素敵だね♥」

マナ「だってそんなこと、きっとマナたちにしかできないことだよ？<sup>きゅ</sup>きゅと姉妹にしか、そんなことできないよね？」

マナ「ねえ、おねえちゃん？ おねえちゃんったら！」

マナ「もう。なんとか言ってよ、おねえちゃん！」

マナ「……はあ」

マナ「さっきからなに言ってるかわかんないよ、おねえちゃん」

マナ「これってやっぱり、この生活始めてからおねえちゃんを笑顔にするために飲ませた、あのお薬のせいなのかな？」

マナ「おねえちゃんがもっともっとマナにおねだりするからついつい飲ませ過ぎちゃって、いつのまにか言葉も話せなくなっちゃった」

マナ「でも、しょうがないよね。だってこうでもしないと、おねえちゃんはマナのこと見てくれなかつたんだもの」

マナ「んふふふ……んふふふふ……」

マナ「ほら、もう十分わかってるとは思うけど、おねえちゃんにはマナしかいないんだよ？」

マナ「だから早く諦めて、マナと結婚しちゃおうね」

マナ「早くマナといっしょになって、このワンルームの中で誰とも出会わずにすむ永遠を手に入れようね」

マナ「『やくそく』だよ、おねえちゃん♥」